

荒野

Heath

ナガイヒデミ

人物

父

長女

次女

声1 (Ⅱ男)

声2 (Ⅱ女)

父 ええ家、悪い家、つちゅうんがあつた。

声2 悪い家、

父 村に、昔。

声2 悪い、て何が。

父 鼻つまんで、息を詰めて、

声2 え。

父 前を通るとき、

声2 前を、

父 そう。

声2 どのの、

父 その家の、

声2 ああ。

父 走って、通り過ぎる。

声2 何で、

父 ようわからんけど、

声2 わからんの、

父 うつるけんぢやろ。

声2 うつる、

父 そう。

声2 何が。

父 それもようわからん。

声2 誰がそがなこと、

父 さあ。

声2 さあ、

父 Nothing.

声2 え。

父 Nothing.

声2 だから何。

父 知らん。

声2 そんな、

寒風の吹きすさぶ音。

特別養護老人ホーム、トゥリーハウスのロビー。

テーブル、椅子、ソファなどが置かれ、受付カウンターがある。受付カウンターの前にノートパソコン。手提げ袋を提げた父、カウンターの前に立っている。カウンターの内側に介護士の制服姿の女。女の背後は事務室で職員らの机が並んでいる。人物はみなマスクをしている。

父 え。何で言うたか。

父、画面に耳を近づける。

父 聞こえんが。もっと大きな声で言うてくれ。

女
(父に) 少々お待ちください。

また、画面に口をつけるようにして、

女、パソコンを操作する。モニター画面を父の方に向ける。

父 元氣なんか。ご飯は食べよんか。どこに居るんぞ。え、そこはどこぞ、

父、背をかがめマスクをはずしてモニターに顔を近づける。

女、眉をひそめて、パソコンを少し父から遠ざける。

父 おし。

父、パソコンを引き寄せ、なおも手を振りながら、

父、笑顔。なおも画面すれすれに顔を近づけ、しきりに両手を振る。

父 わかるか。わしがわかるか。

手提げ袋から写真を取り出し、画面に向かって掲げる。自分と妻の写っている写真である。

女 お時間です。

父 ようにご飯食べいよ。また来るけんの。明日も来るけんの。

父 (画面に向かって) これ誰ぞ。わかるか。え、わかるか。わかったんか。

女 あの、

父 (画面に) 治ったらまた家に帰ろ、の。

父、画面に写真を近づけたり、また自分の顔を近づけたりする。

女、パソコンを終了して、たたむ。

父、その手元を見ている。

父 話があるんぢゃが。

女 すみません、マスクを。

父、マスクをしかけるが、またはずして、

父 あの、誰やらのう、

女 はあ。

父 ケアマネの、

女 平野、ですか。

父 あゝ、平野さん。

女 平野はちよつと手が離せません。

父 ここで待たせてもらうけん。

父、ロビーのソファに座る。

しばらく後、男、受付カウンターからロビーに出てくる。

顔をしかめている。

男 面会はお済みたんでしよう。

父 面會

男 今、

父 面會はしとらん。

男 さつき、パソコンで、

と、受付カウンターを振り返る。

父 あがな、機械やか。

男 今は、

父 どこに居るんや^をらもわからん。

男 いつもどおり、二階に、

と、天井を見る。

父 顔を見んことにや、

男 しょうがありませんけん、今は。

父 ものも言へんし。

男 ものは言えますけん。

父 頼りのうて。何も言はんけん^{なん}。

男 お元気にしとりますけん。

父 直に會わんこと^{じか}にや。

男 あれがおさまったら、また。

父 話があるんぢやが。

男 はあ。

父 あ、誰やら、あの、

男、苦り切った顔。

男 平野は今忙^{せわ}しいて。

父 あんたは話を聞いてくれんけん。

男 話なら、

父 平野さんに會^あふまでは帰らん。

男 迷惑しとるんですが、こっちは。

父 迷惑て、

男 面会はお済みたんじゃし、

父 ほぢゃけん、面會は、

男 お宅だけじゃありませんけん、ここは。

父 そがなことはわかつとる。

男 ほんなら、

父 話がある、て言ひよんぢやが。

父、書類のようなものを取り出し、

父 ここいちゃんと書いてある。「ご意見ご要望があればお申し出ください」

男 ほじゃけん、それは、

父 あんたのう、

男 はあ。

父 わしや、あんたが若い頃から知つとるが、

男 先生、

父 そがに偉いんか、あんたは。役場の叩き上げから、このの、

と、あたりを見回す。

女、カウンターから出て、男の脇に立つ。

女 施設長、そろそろお時間です。

男 ああ。(父に) ほんなら、

父 待て。

女 会議がありますけん。

父 まだ終はつとらん、話が、

男 先生、

父 うん、

男 あんたこの頃、何やら、

父 何ぞう、

男 ちいと診てもらたら、

父 何、

男 町の、病院で。

父 病院

男、女とともに中に入る。

父 まだ話があるんぢやが、

声1 Nothing.

父 え。

声2 Nothing.

父 誰ぞ何ぞ言うたか。

声1 たわいもないことを。何にもならんわい。

声2 何にもならんものは何かにならんかい、小父たん、

声1 はて、ならんかう。無からは何物も生ぜん道理ぢや。

父 よい（かけ声）、誰ぞ居るんか。何ぞ言ふたか、よい。

声1 微生物と結び付ける考え方は、数十年前からあったが、主流から外れるとされた。

声2 しかし今、研究者たちは、この関係を探り始めている。

父 よい、誰ぞう。どこに居るんぞ。

声1 研究者の大部分は、大量の証拠を後ろ盾に、主犯は感染ではなくアミロイドと呼ばれる粘着性の分子であり、

声2 これが脳の中で凝縮してアミロイド斑を形成し、炎症を引き起こして、

ニューロンを殺すと考えている。

声1 しかし微生物感染がアミロイド斑の産生を引き起こし、

父 やかましい。よい、黙れ。

声1 米食品医薬品局FDAは七日、製造販売を条件付きで承認、

声2 関連各社の株価は高騰、

声1 FDAは効果などを調べるよう求めており、十分に確認できなければ承認を取り消す可能性もあると、

耳をふさぐ父。

父 よい、黙れ。頭が痛い、頭が痛いんぢや。

かがんで体を丸める父。

外に車の停まる音。長女が入ってくる。

長女 お父さん。

父 何しにきたんぞ。

長女 座り込んで帰らん、て、

父 誰が、

長女 誰がて、お父さんが。

父 誰が言うたんぞ。

長女 電話がかかってきた。

父 いらんことを、

長女 帰るよ。

父 勝手に歸れ。

長女 迷惑になるけん。

父 關係なかるが、お前に。

長女 あるよ。

父 歸らん。

長女 お父さん、

父 あの、誰やら、ケアマネに、

長女 平野さん。

父 まだ會^あうとらんのぢや、平野さんに。

長女 もうよかる。

父 ようない。話があるんぢや。

長女 平野さんにや、これまでさんざん迷惑を、

父 平野さんにや、

長女 あのね、

父 お金を、

長女 ほじゃけん、それは、

父 りんごも一箱。

長女 お父さんが勝手に、

父 特上のりんごぢや。

長女 持って帰った、私が。

父 え。

長女 りんご。施設長に言われて。

父 どう云^いふことぞ。

長女 ほじゃけん、そういうこと。

父 平野さんに送ったんぢや、わしは。

長女 いかんのよ、ものやお金を送ったら、

父 そいでお前、りんごをどしたんぞ。

長女 学校で配った。

父 なしや言はんかったんぞ。

長女 怒るけん。

父 どしてそがなことしたんぞ。

長女 当たり前じゃろ。

父 お前、

長女 昔とは違う。

父 何が、

長女 病院じゃないし、ここは、

父 わかつとる。

長女 わかつてない。

父 何が、

長女 何遍も言うたのに、

父 何を。

長女 介護士さんのこと、「看護婦」で、いつつも、

父 看護婦は看護婦ぢゃ。

長女 違うんよ、昔とは。

父 何が違ふんぞ。

長女 いろんなこと。

父 いろんなことで、何ぞう。

長女 昔はあったかも知れんけど。

父 昔で、

長女 付け届け、とか。お医者さんや看護師さんに、

父 前に、お母さんの入院しとった、

長女 あの病院でも、お菓子やなんか渡して。先生や看護師さんやお掃除の

人らに。

父 喜んでもろた。

長女 人から「ありがとう」言われたいだけじゃ。

父 何。

長女 感謝されたいだけじゃろ。

父 何を、

長女 自己満足。

父 何のことぞ。

長女 第一、ここは病院じゃなかる。

父 大して變^かはらんかるが。

長女 自分とこだけ良うしてもらお思うんは、

父 お禮^{れい}するんはあたり前ぢゃ。世話になりよんぢゃけん。

長女 何か渡したけん、ああせい、こうせい、言うんは、

父 話、したいだけぢゃ、平野さんと。

長女 お父さん、

父 平野さんに會ふまではここを動かん。

長女 言うたろがね、

父 何、

長女 りんごは私が持って帰った。

父 お金は、

長女 お金は平野さんがお父さんに突き返した、その場で。

父 違ふ。

長女 お父さんの勘違いじゃ。

父 勘違いやかしやせん。

長女 ほんなら忘れたか、

父 お前、見よったんか。

長女 聞いた。

父 誰から。

長女 平野さんから、施設長さんからも。

父 平野さんは、

長女 帰るよ。

父 いや、

長女 迷惑なだけじゃけん、ここにおつても。

父、動かない。

長女、父を引きずり出そうとする。

父、大の字に寝る。

声1・2 (節をつけて) 今歳や阿呆の外れ年だよ、

りこう
聡明な手合が阿呆になつて、

智慧の使ひやうもご存知ない程、

手ぶりも、そぶりも馬鹿らしい。

父 よい、誰ぞう。何ぞ言ふたか。誰ぞ何ぞ言ふたんか。

声1 小父たん、おれはお前まひが女兒むすめツ子らを阿母おつかさんにしたんで、それで唄が好きなナツちまつた。

父 出てこい、誰ぞう、出てこい。

声2 おれはもう阿呆やを止めやツちまひたい。

父 止めたらええがあ。

声1 でも小父たん、おれまひアお前になるのは厭だ。

父 どしてぞ。

声1 お前まひは智慧りやうはしの両端を削はツちまつて、

声2 中央まんなかを空洞がらんどうにしツちまつた。

父 何を、

長女 お父さん、

父 何ぞう、

長女 何わけわからんことを、

父 何のことぞ。

長女 もう、ええけん。

と、暴れまわらんとする父を、長女、ずるずると引つ張つて連れてり
行こうと奮闘。父、引きずられながら叫んでいる。

父 どこに居をるんぞ。

長女 お父さん、

父 わしはここい居をるけんの。

長女 ちゃあんと二階で、

父 二階

長女 具合がい良うして貰もらいよんじゃけん、お母さんは。

父 聞こえるか。どこに居をるんぞ。また来るけんの。

数日後、特養のロビーの椅子。

長女、次女が並んで座っている。

次女 私、やっぱり、

長女 何、

次女 はずした方が、

と、腰を浮かせる。

長女 もうバレとるよ。

次女 え。

長女 住所書いたろ、前に面会に来たとき。

次女 ああ。

長女 うん。

次女 ほいでも、

長女 知らんふりで。

次女 良からか、

長女 言うてあるんじゃけん。

次女 何、

長女 きょうだい姉妹二人で来る、て。

次女 うん。

座り直す次女。

長女 言うたのに。

次女 何、

長女 帰って来いでもええ、て。

次女 そんな、

長女 何。

次女 せつかく年休とって、私。

長女 言うたんじゃろ、お父さんも。

次女 何、

長女 電話で。(父の口真似)「わからんわけないんぢゃけん、どこの、誰か」

次女 ああ。

長女 (父の口真似)「どうぞあつたら、あそこぢや、て皆に言はれる」

次女 どうぞあつたら、て、何が。

長女 何やらかやら。あそこの家に、他所よそから帰つもとる者がおる、ゆうだけで。

次女 ほいでも、

長女 何。

次女 放つとけんから、お父さん。

長女 差別をするな、て。

次女 え。

長女 有線じゃ、そう放送しよるようなけど。

次女 何。

長女 もしあれが出ても。

次女 ああ。

長女 今はまだ、ないけど。

次女 うん。

長女 もし出ても、村長が、差別をするな、て。

次女 差別、ね。

長女 二週間ルールもあるし。

次女 何。

長女 言うてなかった、

次女 聞いてない、と思う。

長女 県外から来た者や、^{もん}

と、次女を指し、

長女 県外の人に接触した者は、^{もん}

と、自分を指す。

長女 二週間はそうゆう、関係の人とは会えん、て。

次女 関係の人、

長女 ケアマネさんや介護士さんや社協の人や、

次女 シャキヨウ、

長女 社会福祉協議会。

次女 そうなん。

長女 うん。

次女 じゃのうて、

長女 何。

次女 二週間、

長女 らしい。

次女 私、やっぱり、

と、腰を浮かしかける。

長女 言うてある、て、言うたろ。

次女 二週間ルールは、

長女 まあ、それは、

次女 建前、

と、座り直す。

長女 そうとばあいも言えん。

次女 どっち、

長女 ずっと会えんままらしい、ケアマネさんも介護士さんらも、県外にお
る娘さんや親類に。

次女 私は別に、

長女 何。

次女 かかってないけん。

長女 潜伏期間ゆうもんがある。

次女 姉さん。

長女 何。

次女 疑うん、

長女 いや、

次女 うん。

長女 と言うか、

次女 何。

長女 わからんから、誰でも、

次女 何が。

長女 もし、^{かか}懼つとつても。

次女 そりゃ、まあ。

長女 忙しいんじゃろ、あんたも。

次女 そりゃ、まあ。ほじゃけど。

長女 うん、

次女 姉さんだけに押し付けるんは、

長女 しょうがない。近くにおるんじゃけん。

次女 仕事は、

長女 忙しいよ、ずっと。

次女 四、五日泊まって、話でもして、と。

長女 まあねえ。

次女 洗濯して、^{ぬく}温いご飯作って。

長女 うん、

次女 そしたらちよつとは落ち着くと思たんじゃけん、お父さんも。

長女 気いつい-tonじゃろ、あんたも。

次女 何。

長女 もう過ぎてしもたような、そういう段階は。

次女 そういう段階、て。

長女 普通の話、ゆうか会話ちゆうもんが、なかなか、

次女 うん。

長女 ああ。

次女 何。

長女 あれ、[・]さえ来んかったら、ねえ。

次女 そがなこと言うても、

長女 もうちよつと、どうにか。

次女 お父さん、

長女 うん。

次女 まあねえ。

長女 体操教室や朗読教室があつた頃はねえ、

次女 うん、

長女 皆に褒めて貰えて。先生、いつも元気なのう、て。

次女 ああ。

長女 まあまあご機嫌で、

次女 うん。

長女 そういう繋がりも切れてしてもて、

次女 ほうじゃね。

長女 人と話すことも無うなつて、

次女 しょうがないよ、今は。

長女 ここも、ねえ。

と、見回して、

長女 前みたいになつて。普通にお母さんに会えよつたら、ねえ。もうち

よつと、どうにか、

次女 ほいでも。

長女 何。

次女 怖いし。

長女 え。

次女 あれ。

長女 あれ、

次女 クラスタ、とか。

長女 まあ、ねえ。

次女 対応でけんかろ、ここじゃ。

長女 うん。

次女 村でも、県でも。

長女 ほじゃけん、あんたは帰つて来ん方が、

次女 もう、

長女 何。

次女 さつきからくどくど、くどくど。

長女 別に、私は、

次女 お父さんみたように、

長女 ちよつと、

次女 何、

長女 だいたい、あんたが、

次女 姉さんは昔から、

女が姿を見せる。先ほどと同じ介護士の制服姿。

長女、次女、立ち上がる。

女 すみません、お待たせして。

長女 いえ、

女 申し訳ありません、

長女 え。

女 もうしばらく、お待ちいただけますか。

長女 はあ。

女 ちょっと、立て込んでおりました、

女、せかせかとロビーを横切つてゆく。

次女 忙し^{せわ}そうね。

長女 いつもあんな感じ、ここは。

次女 まあねえ。

長女 一遍に言うときたい、いうのはあるらしい。

次女 一遍に、

長女 私ら姉妹^{きょうだい}二人に。施設^{こし}としても。

次女 言うときたい、て、

長女 今日。

次女 何言われるんじやろか。

長女 うん、

次女 身に覚えは、

長女 ある、

次女 ある、

長女 充分、

次女 お父さんのこと、

長女 まあねえ。

次女 こないだの、

長女 すごかったんじゃけん、

次女 ここで、

と、あたりを見回す。

長女 うん、

次女 介護士さんや施設長の見よるところで、

長女 ほかの、職員の人らも。

次女 恥もええとこ、じゃね。

長女 そんな、恥とか、

次女 何、

長女 とつくに、

次女 うん。

長女 ただ、施設や、近所に迷惑だけは、

次女 もうかけとるじゃないか、充分。

長女 ほいでも、もうこれ以上は、

次女 まあねえ。

長女 お母さんのためにもねえ。

次女 今日は、そいで、

長女 まあ、ずうっと、積み重なつとるもんが、

次女 お父さんの、

長女 いろいろとねえ。

次女 文句を、

長女 たぶん。注意、というか。

次女 注意されてもねえ、

長女 こっちが悪いんじゃないけん、お父さんのことは。

次女 ほいでも。

長女 うん、

次女 どうする、

長女 何、

次女 お父さん、

長女 どうする、て。

次女 閉じ込めとくわけには、

長女 まあねえ。

次女 首に縄つけとくことも、

長女 でけんねえ。

次女 困ったねえ。

長女 私らだけなら我慢するんじゃないけど、また施設やよ所に迷惑を、

女がやってくる。

女 大変お待たせしました。

長女、次女、立ち上がり、お辞儀をする。

長女 母がいつもお世話になっています。

次女 この度は父がどうも、大変なご迷惑を。

長女 申し訳ありません、いつも。

女 いえ、まあ、どうぞ。

女、椅子を指す。長女、次女、座る。

女、テーブルを挟んで二人の向かいに座る。ちょっと椅子を引き、距離をとる。身じろぎをする次女。

女 (長女に) 先日の件ですが。

長女 ええ。

女 お父さまは、「平野がお金を盗った」とおっしゃるんですよ。

次女 「盗った」、

女 はい。

次女 あの、

女 はい。

次女 父は、「盗った」ではなく、「あげた」と。

女 盗った、と言われました。

長女 ケアマネさんにお金を渡そうとしたのは父の落ち度です。

女 平野はその場でお返ししたんです。

長女 よくわかっています。

女 お父さまは平野が受け取ったと思い違いをされて、

長女 ええ。

女 それがいつのまにか「平野がお金を盗った」と、

次女 あの、

女 はい。

次女 父は、母のことを思う一心で、

女 物やお金で、入所者さんが優遇されることはありません。

長女 ええ、それはもちろん。

次女 すみません、なにぶん、父はもう九十四で、認知の方も、だいぶん、

女 にしても、「もう今回は」と、施設長も、

長女 はあ。

女 退所していただくことになりました、お母さまに。

息をのむ二人。

長女 退所、

次女 退所、って、

女 まあ、減多にないことなんですが。

長女 待つてください。あの、

女 はあ。

次女 それは、父のせいですか。

女 はい。

次女 今回の、

女 これまでにも、いろいろと。

次女 はあ。

女 (長女を指し) こちらはよくご存知だと思いますが。

長女 それは、

女 お母さまにもっとリハビリをして欲しい、とか。

長女 ええ。

女 お食事のこととか。

次女 はあ。

女 よくわからない個別の要求を書いてきて、文書で回答するように、と何度も。

長女 ご迷惑をおかけして、

女 ここは特養ですし、

長女 はい。

女 応じられることにも、やはり限界が。

長女 ええ。

女 何度も申し上げましたが、

長女 はい。

女 人手も少なくて、

長女 ええ。

女 まして今は、あれ、で。

次女 ええ。

女 大変で、何もかもが。

長女 ですよね。

女 消毒とか、除菌とか、前にも増して、

長女 わかります。

女 お一人の感染者も出さないように、と。

長女 ええ。

女 そんな中で、お父さまは何時間も、ロビーで、

次女 （長女に）何時間も、

長女 （次女に）うん、まあ。

女 こないだの文書に回答を出さんと帰らん、とか。

次女 すみません。

女 平野も誠心誠意お答えはしたのですが、

長女 ええ、それは。

女 その答えがまた気に入らないと、お父さまは。

長女 申し訳ありません。

次女 父はわかっていなくて。施設と病院の違いとか。

長女 母に、早く元気になってここを「退院」して欲しいと思っているみたいで、

次女

介護保険制度のことも、特養のこともわかってなくて。「なしや（な

ぜ）お母さんに會はさんのぢや」、ばっかりで、

女 そのへんはご説明させてもらったのですが、私も、平野も。

長女 ええ。

女 平野はお宅まで伺って、何度も、丁寧に。

長女 ほんとにお世話になって、

女 その時は納得したようなことをおっしゃっても、あとで覚えてお

れないらしくて。

次女 すみません。

長女 あれが来る前は、毎日ここに通って、父は。

女 ええ。

長女 母に会えるのを楽しみに、

次女 その頃は何とか保^もっていたようなのですが。父の、気持ちも。

女 ご主人が健在なのは、お母さまだけです。

長女 はい。

女 ほかの入所者の方は、みなさんお独^{ひと}りで、

長女 ええ。

女 歩ける方もお母さまだけで、

長女 こちらのリハビリのおかげです。

次女 本当に。

長女 また靴が履けるようになるなんて。

次女 (長女に同意して) ねえ。

女 ほかはみなさん、車椅子で。

長女 そうですね。

女 廊下と食堂を、手摺り伝いにのべつ歩き回って。家に帰る、帰った

い、ばかり言っておられます。

次女 誰^{だあれ}も会いに来んけんね、あれ^{あれ}のせいで。

女 他の人のベッドで横になっておられたこともあります。

次女 そうなんですか。

女 夜も、眠れないで歩き回っておられることも多くて。

次女 お母さん、かわいそう。

女 精神科に、お母さまの安定剤を取りに行っていたのですが。

ふた月に一度、お父さまに。

長女 ええ。

女 そのとき施設^{こち}は、お母さまの症状を記録した文書を作成してお渡し

しています。病院の先生に読んでいただくように。

長女 ああ、ええ。

次女 文書

長女 (次女に) 病院の先生に提出する書類。

(女に) 一層不安になったみたいなんです、あれを読んで。

次女 誰が、

長女 お父さん、

次女 何が書いてあったん、

長女 今言われたようなこと。

次女 何、

長女 お母さんがほかの人のベッドで横になっったり、夜中も廊下を歩

いたり、

女 ここふた月、病院の先生には渡されなかったらしいんです。

次女 何でまた、

長女 隠しなかった、

次女 病院の先生に、

長女 さあ。

女 そういう、いろんな行き違いが増えてきて。以前にも増して。

次女 ええ。

女 お母さまの責任者を、お父さまではなく、（長女を指し）こちらの娘さんにと、お願いしてきましたが、前々から。

長女 それは私からも何度も、父に。

次女 私からも。

女 ええ。

長女 どうしてもきかなくて、父は。

次女 それさえできたらねえ。

長女 すみません、母の保険証やなんかを、父が渡さなくて、

女 保険証は本来、こちらでお預かりするものなのですが、

次女 （長女に）そうなん、

長女 （次女に）無理に持って帰ったって、お父さんが。

女 当方の負担も大きいんです、何度も申し上げたとおり。

長女 ええ、それは。

女 Zoomでお父さまと面会したあとは、いつも以上に落ち着かなくなるんです、お母さまは。

次女 はあ。

女 夕方から夜にかけて、特に。

長女 ええ。

女 お父さまは、画面越しに写真や何かを見せて、「これ誰ぞ、これ誰

ぞ」と、お母さまに迫って。

次女 あの、

女 はい。

次女 退所は父のせい、なんですよね。

女 はい。

次女 母の症状が重くなったためではなくて。

女 ええ。

父がおぼつかない足取りで、背を丸めてうろろう歩き回っている。

父 無いんぢやが。なんぼ^{さが}搜してもないんぢやが。

声1 何。

父 どこいやらにいつてもて。

声1 何が。

父 何やら、あの、何やら。

声1 そりや、^{そのはず}其筈だよ、小父たん。

父 よい（かけ声）、誰^{かきねすいめ}ぞ何ぞ言ふたか。

声1 （節をつけて）垣根雀が閑古鳥をば^{そのへんれい}

長う育てた其返禮に、

おのが首ツ玉喰ひ切られてししまった。

そこで^{かんでら}燭がふつと消えて、あとは真ッ暗^{くらやみ}の昏暗ぢや。

父 よい、

声1 気をつけろ、

父 何ぞう、

声1 気をつけろ、娘らが、

父 よい、誰ぞう、よい、

と、虚空に。

次女 あの、

女 はい。

次女 母や、私たちは、どうしたら。

長女 父も高齢で、認知の方もだいぶん、

次女 私たちも仕事や自分の家があるし、つきっきり、というわけには。

長女 それに、もう何も聞いてくれなくて、母は。私たちの言うことを。

次女 身支度も、トイレも、

数日後。父の家、すなわち長女・次女の実家である農家の居間
(和室)。奥に仏壇。

父 どこに居るんぞ。をどこいやったんぞ。

長女 どこ、て。

父 お母さんを、どこに。

長女 聞いたんじゃろ、お父さんも。

次女 もうトゥリーハウスにはおらん。

父 ほぢゃけん、

次女 退所させられた。

父 何、

次女 お父さんのせいで。

父 嘘つけ。

次女 嘘じゃない。

長女 お母さんは、

父 お母さんはわしが看る。

長女 ほじゃけん、それは無理、

次女 お母さんが家におる時分は、よう怒りよったくせに。

父 怒りやかしやせん。

次女 お母さんはね、

父 何ぞう。

次女 もうほかの、施設に、

父 何、

長女 私が、

父 お母さんの書類、保険證やらがなけりや、

長女 介護保険証、介護保険負担割合証、医療保険証、病院の診察券。

父 お前、

長女 持ち出した、私が。

父 持ち出した、

長女 (仏壇を振り返り) 全部あの、仏さんの引き出しに、

父 お前、勝手に、

長女 責任者は私にしたけん。手続きも済ませた。

父、飛び上がる。

父 魂消^{たまげ}たが。

次女 (長女を見て) 私らで相談して。

父 お前ら、結託して、

長女 結託、て。

次女 姉さんが何遍も、これまで何遍も言うてきたのに。

父 何を、

長女 どれだけ助かるか、て。責任者を、お母さんの後見を私にしてくれ

さえしたら、

次女 もっと早う、姉さんにしとつたら、こがなことはない、

長女 お父さん。

父 何ぞう。

長女 前に言うたろがね。

父 何。

長女 忘れたん、

父 (怒って) 何を、

長女 「天皇も代替はりをしたけん、うちも代替はりをしようと思っんぢや」

父 代替はり、

長女 あれは嘘じゃったん、

父 黙れ、頭が痛い。

長女 お父さん、

父 頭が痛い。言ふな。

次女 お父さん、

父 お母さんはどこに居^をるんぞ。どこいやったんぞ。

次女 言うたらまた、無理難題を言う、新しい施設の人に。

長女 理屈の通らん要求をする。何十分も何時間もケアマネさんを引き止めて、

父 そがなことはせん。

次女 したじゃないか。

長女 介護士さんやケアマネさんにも暴言を、

父 暴言、

長女 ほうよ。

父 誰が。

長女 お父さんが。

父 暴言やか言はん。

長女 言った。

父 わしはただ、お母さんにもっとリハビリを頼む、て。特養を早う退院でけるやうに、て。

次女 もし今度退所させられたら、

長女 今度こそ無^のうなるけん、お母さんの行くところ。

父 要望出して、何がいかんのぞ。

長女 うちにばかりかかりきつとるわけにいかんかる。

次女 向こうは忙^{せわ}しいし。

父 規約に書いてあつたんぢや。

長女 応えようのない要望出して、相手の答^{こた}えに満足せずに、何時間も事務

所で粘る、そがな人がおつたらお父さん、どう思う、

父 そがなことはしてない。

次女 まだ言いよる。

長女 今までようがまんして対応してくれたと思う、トゥリーハウスも。

父 お母さんは、今どこに、

長女 いつでも会いに行けるけん。

次女 お父さんが、私らの言うこと聞いて、お母さんのこと任せてくれたら、いつでも。

父 お前ら、施設と結託して、

次女 出た、結託。

父 隠した。

長女 隠した、

父 お母さんを、どつか知らんところに。

長女 何を、

次女 馬鹿な、

父 前代未聞ぢや。古今東西こがなことがあつたか。

次女 ないよ。

父 家庭崩壊よ。もう、家庭崩壊よ。

長女 誰のせいで、

次女 崩壊しとんはお父さんだけじゃ。

父 教へてくれ、どこに、

次女 ほじゃけん、それは、

長女 第一、今はあれ、で、

父 見るだけでええんぢや、外から。

長女 行ったらそれじゃ済まんかる。

次女 中に入ろうとする。

長女 中に入って、言い張る。お母さんの責任者を自分に、と。

次女 くどくどと、延々と。

父、立つ。

長女 何

父、仏壇の中をのぞき、振り向いて、

父 どこいやったんぞ。

長女 ほじゃけん、お母さんは、

父 何やら、あの、何やら、

長女 何。

父 お母さんは、

と、手のひらで口を覆っている。

長女、次女真似る。そのまま顔を見合わせる。

次女 え、

長女 マスク、

父 ほうよ、

次女 今、お母さんは、て。

父 ここい置いといた、

長女 捨てた。

父 捨てた、

長女 うん。

父 お母さんを、

長女 マスクじゃろ。

父 お前、また勝手に、

長女 使ったマスクじゃろ、

父 昨日、一日^{いちんち}だけ、

次女 毎日換えないかんよ。

父 お母さんを、

次女 マスクじゃろ。

父 として、

次女 としても。

父 誰が決めたんぞ。

次女 決めたんじやのうて、そうせないかんの。

長女 あのマスクは使い捨て、

父 マスクぢやのうて、

長女 何。

父 お母さんを、

次女 さつきから言うように、

父 新聞は、

長女 新聞、

父、襖^{ふすま}を開けて隣の部屋へ。

長女 どこ行くん。

次女 何するん。

父 ここはわしの家ぢや。何しようと勝手ぢや。

父、隣の部屋に頭を突っ込んでいたが、振り返り、

父 どこいやったんぞ。

長女 何。

父 お母さんを、

次女 ほじゃけん、お母さんは、

父 新聞。ここい積んどいたろが。

長女 そこにあろがね。

父 お母さんが、

長女 新聞じゃろ。

父 もっと前の。

次女 前、

長女 半年も、前の、

父 お母さんが家に居^をった時分の、

長女 そがな古い、

父 倒れる前の、

次女 もう十年も前の、

父 要るんぢや。

長女 持って行つた、

父 持って行つた、

長女 半年前のなら。

父 どこい。

長女 納屋。

父 納屋、

長女 今度、資源ごみの日に、

父 何、

長女 何、

父 お母さんを、

長女 新聞じゃろ。

父 取ってくる。

長女 ちよっと、

と、止めようとするが父は止まらない。玄關を出て家の脇の納屋へ。

寒風の吹きすさぶ音。

声1 納屋に入って、古新聞の束をほどこいて何か選^よっている。

声2 冬の夜、シャツにステテコ、ガウンで。

声1 娘たちが結託して、大事なものを捨てた、と。

声2 結託、結託、結託と。

父を追って納屋へ来る長女、次女。

長女 お父さん。

父 わしにやこがな娘はおらん。そがな顔、もう二度と見とうもない。

次女 お父さん、

父 頭が痛い。歸れ、歸ってくれ、何も土産はないが。

長女 お父さん、もう遅いし。

父 今宵は納屋で寝る。

と、寝る。

長女 こがな寒いとこ、寝たら死ぬよ。

父 死にやせんわい。お母さんが丈夫に産んでくれとるけん。

長女 そがな薄着で、

次女 最高血圧百八十。

長女 お父さん、死ぬけん、中に、家に入る。

父 責任者はわしぢや、お母さんの。

長女 お父さん、

父 何でお前にせないかん。

長女 ほじゃけんそれは、

父 お母さんを捜す、どうやってでも。

次女 そがなことはでけん。

父 やってみなわからん、でけるか、でけんか。

次女 お父さん、

父 突き止めてやる、どこまでいっても。

次女 突き止める、て、

父、古新聞の束を抱えて立ち、突きつけて、

父 納得のいくまで自分で調べて、そいから、行政。行政があかざったら

司法、警察

長女 お父さん、

父 見つけてみせる、お母さんを。

次女 あのね、

父 是非とも取り返して。

次女 お父さん。

父 何があっても、どこまででも。

長女 お父さん。

声1 リヤの小父たん、リヤの小父たん、待ッとくれよ。阿呆を伴れてツと

くれよ。

声1・声2 (節をつけて) 狐を人が捕ったなら、

それから、あんなお娘をも

縊め殺すのが定なれど、

おれの帽子ぢや縄さへ買へぬ、

それで阿呆は尾いて行く。

父 おゝ、おのれく、予が乗馬に鞍を置け。家來共を呼び集めい。

長女 え、

父 親の情を棄てゝしまはう。これほどにしてやった父をば。馬の支度は

どうした。

声1 驢馬が何疋もその支度にいつてるよ。

声2 七つ星の数は、七つしか無いといふ其理由が面白いや。

父 八つとは無いからであらうが。

声2 その通り。お前は立派に阿呆になれらア。

父 是非とも取り返して。おそろしい恩知らずめ。

声1 小父たん、お前がおれの阿呆だったら、おら撲るよ、餘り早く齡を

取ったから。

父 どうして。

声1 聡明にもならんうちに齡を取るやつがあるもんかい。

父 おゝ、天よ、氣ちがひにならせて下さるな、氣ちがひに。正氣にして

おいて下され。氣ちがひにはなりたくない、氣ちがひには。

どうぢや、馬の支度は出來たか。

声1・2 出來ましてございます。

父 さア、來い。

長女・次女 お父さん、

父、納屋から自転車を引き出す。古新聞の束を自転車のカゴに載せ、
自転車に乗ってしばしぐるぐる回る。

父 おゝ、天にまします神々、もし神々にして老人を憎みたまはずば、こ

れをば餘所事とばし思し召さるな。御使ひ神をお下しあつて、何卒お

見方くだされい。(娘たちに) やい、おのれ、此髭を見ても恥ぢをら

んか。

次女 髭なんかないじゃないか。

声1 冬はまだ去ツちまはないなア、雁がそツちへ飛ぶやうぢやア。

父 おゝ、癩が、此胸先きへ。ヒステリカ・パッションめ、下れ、汝、

沸き上る心の悩み、汝の居處は下ぢやわい。

長女、次女、自転車を乗り回す父をせんかたなく見ている。

声1 次から次へと、

声2 昼夜間なしに、

声1 ようもまあ、

声2 突飛でひどいことをする。

声1 一日中電話をかけまくる、

声2 郵便局長、村の保健師、農協の営業マン、

声1 親類、教え子、誰彼かまわず。

父 お母さんの居る^をところを聞いたんぢや。

声1 自転車でふらふら遠出して、

声2 峠を越えて、えっちらおっちら、

声1 見知らぬ施設に入り込んで、何やかや聞いたりする。

声2 包括支援センターの人に迎えに行かせる。

父 お母さんが居る^をかと思たんぢや、あそこに。

次女 あれやこれやと私らを責める。

長女 筋が通ってないけん、返事の仕様もない。

次女 しょうことなしに黙っとったら、

父 何ぞ言ふことはないんか、

次女 て、また怒る。

長女 言うことは山ほどあるけど、

次女 聞きやせん、何言うても。

長女 思い込みがころころ変わる。

次女 ほいですぐに忘れる。

声1 始末に負えん、

声2 愚かな年寄りは。

長女 代替わりのなんの言いよったくせに、

次女 ありもせん権力ふりまわして。

声1 わめいたり、

声2 夜中に外をうろついたり。

声1 包丁まで出そうとしたり、

次女 壊れていく。

長女 お父さんが。

次女 私らも壊れていきそうな、一緒に。

次女 それを見て、ますますお父さんが。

父 もう崩壊よ。家庭崩壊よ。

次女 崩壊しとんはお父さんだけじゃ。

父 わしは誰ぞ。わしは誰か、それが知りたい。

長女 お父さんじゃろ、これも。

父、いつしか自転車を停め、杖を手に、

父 わしがこがに腰曲^{こが}げてのろろ歩くか。こがにゆっくりしかようもの

言はんか。なんもかも、わしがわしのいうことをきかん。朝が来て、

晝^{ひる}になって、日が暮れても、目が醒めんままぼーっとしとる。さうか

と思や、夜中も目が冴えて冴えて。誰か居らんのか、教^をへてくれる者^{もん}

が。わしは誰ぞ。

声1 王の影法師。

父 十四で親父が死んでから八十年、ずうつとこの家の家長ぢや。舊制きゆうせい中學出て師範學校に上がって村で先生になって校長にもなって定年まで。縁あつてとより鄰村から嫁さんもろて長女と次女が。いや、そがなことは全部見せかけで、自分にや孝行な娘があると思ひ込んだつただけかも知れん。

声1 跡取り、家長、先生、校長。

声2 年取つてもいつまでも元気なね、先生。

長女 まわりから、褒め言葉だけを浴びて、九十四年間生きてきた。

次女 非難がましい言葉、マイナスの評価はスルー。

長女 それが長寿の秘訣。

父 お前らはわしの娘か。

長女 頼むけん、私らの言うことを、ちいともええけん、ちゃんと聞いて。

次女 誰が見ても、理屈がとおらんことばあい言いよんじゃけん。

長女 親類中の、近所中の、村中の人が、誰が聞いても、

次女 頼むけん。年とつとんのに、体も動かんのに、気持ちだけ昔のままのようなつもりでおるんはやめて。

長女 もっと年寄りらしゅうに、

父 本氣で言ひよんか。

次女 本氣じゃないんはお父さんだけじゃ。

父 考へたことあるんか。

次女 何。

父 じきに年寄りぞ、お前らぢやて。

次女 わかつとるよ、そがなことは。

長女 私らももう還暦じゃ。

父 どがな氣持ちがするか。自分がおんなじこと娘から言はれたら、

長女・次女 お父さん。

父 何ぞう、口揃へて、

長女・次女 お父さん、

父 結託して、

長女・次女 結託、

父 子どもの時分は、お前ら、喧嘩ばあい、

長女 そがな昔のこと、

父 どつちがお母さんの手伝ひをしたの、せんの、

長女・次女 お父さん、

父 ひとの物を勝手もんに使うたの使はんの何の、

長女・次女 お父さん、

父 結託するんなら、なしや(なぜ)、あの時分に、

次女 お父さん。

父 何ぞ。

次女 姉さんが家を片付けて、度々掃除もしてくれて、ご飯も作りに来てく

れたけん、これまでやってこれたんじゃ。もう一回姉さんに、

父、膝を折り、

父 我女よ、わしは齡を取つてゐます、老人は無用なもんぢや、斯う膝を

突いてお願ひする、どうぞ著物を下さい、寢床を、食物を。

長女 お父さん、

次女 やめて、

父 見い、これが家長たる者に似合ふか。

長女 お父さん、

父 お前らに頼るくらゐなら、もう、このまま外に、

次女 ちよつと、

父 凍え死んでも、

長女 お父さん、

父 頼むけん、もう頼むけん。

次女 お父さん、

父 氣違ひにはなりたいないんぢや。わしを氣違ひにするな。

次女 また、それを。

父 わしは誰ぢや。誰ぞ教へてくれ。

長女 ほじゃけんお父さんはお父さんじゃろ、

声1 分別が昏睡しても。

父 もはやお前らの父ではない。

声2 そうかも。

父 お前らの父は、こう杖をついたり背中を丸めたりはして居らぬ。

長女 そういうことじゃのうて。

父 わしは誰ぢや、誰ぞ教へてくれ、さあ、誰ぢや。

長女 お父さんじゃないお父さん。

父 お父さんぢやないお父さん。

長女 出口がみつけれない。ぐるぐる彷徨つて、

父 出口、

長女 うん。

父 探しよんは入り口ぢや。

長女 入り口。

父 施設の、

次女 お母さんなら、

父 納屋の、

長女 納屋なら、

父 行方不明ぢや。もう行方不明よ。

長女 あそこに、

と、納屋を指す。

父 お母さんが、

次女 お母さんは、

父 どこに居るんぢや。

長女 何遍も言うたように、

父 行方不明ぢや。家庭崩壊ぢや。前代未聞よ。

次女 ほじゃけん、

父 出口は、

長女 入り口じゃろ、探しよるんは、

父 あるんか。

次女 何。

父 あつたら教へてくれ。

長女 何が。

父 出口。

次女 入り口じゃろ。

父 出口も、入り口も。

次女 ないかも、しれんけど。

父 ほれみい。

長女 とっかかりくらいはある。

父 とっかかり、

長女 と、思う、けど。

父 けど、

長女 見ようとせん、そこにあるとっかかりを。

父 見ようとせん、

長女 そう。

父 誰が、

長女 お父さんが。

父 そがなことはない。

次女 同じところをぐるぐると、

声1・声2 ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる。

父 もうここら、道歩きよる人もほとんど居らん。みな、何やら、あの、

何やら、口に、

次女 マスク、

父 マスク。ほうよ。マスクしとる。マスクしとらん人は居らん。

次女 どこでもそうよ、今は。

父 どこの誰やら。顔も、

長女 わからんね。

父 誰あれも「先生」やか言うてくれん。

声1 教え子たちにも、あれほど慕われたのに。

声2 志 ある田舎教師の面影は、もう、どこにも。

長女 同級生のおじいさんらとも、仲良かったのに、

父 もう今は、四人しか、

次女 うん。

父 みな体が弱って連れ合ひも亡うなつて。家で寝とるか、施設に入つて
るか。

長女 ああ。

父 杉山の小夜子も、入院して長いが、もう物は食べれいで、点滴して、

次女 会えたん、叔母さんに。

父 いや、會へん。

長女 今はね、どこの病院も、

父 見舞ひに行たら看護婦が出てきて、丁寧の説明してくれたが。小夜子
も、もう、いよいよ、いかんやうなけん。

次女 うん。

父 坂口も、「義兄さん、義兄さん」て言ふてくれたが、亡うなつてしもて。

長女 お気の毒じゃったね、坂口のおいさん。

父 お母さんでも家に居つてくれたら、話でけるのに。ああちゃった、
こうちゃった、ゆうて。

次女 ほうじゃね。

父 誰もかれも亡うなつてしもた、て。

声1 広い台所に一人。

声2 足元から夕闇に沈んでいく。

声1 納屋には一年分の米。

父 ほぢやのに炊飯ジャーには一粒の飯もない。

声1 畑には大根、白菜、ジャガイモ。

父 穫りに行く氣力も失せ、

声2 何とかこなしていた煮炊きも、

父 何もかも、わからんやうになつてしもた。

声1 瓶の蓋を開けたら閉めない。

声2 冷蔵庫の中のを取り出したら元に戻さない。

声1 米を研いで炊飯器に、そしてスイッチを、

声2 たったそれだけのこと、のハードルが上がつて、

父 いつも焦げる、鍋が。

声1 点火したまま忘れている。

声2 焦がした鍋、のころがる、焦げ臭い匂いの台所。

父 食ふもんがない、もう日暮れたのに。

声1 テレビの料理番組、メモをとっているつもりが、

声2 手も字も震えている。

声1 娘らへの言い分を手紙にしたためたつもり、

声2 意味が通らない文章。

声1 飲みさしのペットボトルや蓋、居間に台所にあちこちに。

声2 宅配の弁当、中身が中途半端に残つて、蓋を開けたままテーブルに置
きつ放し。

父 娘らが來ては、勝手にものをいぢつて歸っていく。掃除やら洗濯やら
片付けやら言うて。あづく、あれも無い、これも無うなつとる。あれ
はどこいったんぞ、どこいやったんぞ。

長女 夏冬の衣替えも、布団干しも、全部してあげて、私が。

父 食ふもんがないんぢや、どうしたらええかわからんのぢや。お母さんに助けてもらひたいんぢや。特養を「退院」させて、元どほり一緒に静かに暮らしたいんぢや。

長女 ほじゃけんそれは、

次女 無理。

長女 としてわかってくれんの。

父 まるで手負ひの獣を見るやうに、わしを。娘らは。

声1 細く開けた戸の隙間から、

声2 目ばかりのぞかせたガラス窓から、

声1 ひっそりと様子を伺うご近所。

長女 終わりのないくどくど。

次女 自分の言いたいことだけ、滔々と、

声1 ネバーエンディングストーリー。

声2 口を挟めば怒る。

声1 顔が変わってしまった。

声2 わずかばかりの間に、

次女（父に）まあいっぺん映してみとん、

父 何、

長女 鏡に。

父 鏡

長女 いつの間に、こがな、

次女 歯あ食いしばって、

長女 見たこともない悪相に、

声1 落ちくぼんだ目。らんらんと光って、

声2 尖った顎と耳、顔色は妙に艶々。

声1 夜中まで電気を煌々と、

声2 眠っているのかいないのか、

声1 朝もまだ暗いうちから、

声2 悪態を。

声1 噛み付かんばかりに。

声2 むき出しの、凄まじい負のエネルギー。

次女 あんな狂気と敵意、これまで一体、どこに、

長女 今にも卒倒しそう。しかしその気配もなく、

父 はよ言へ、言はんかい。お母さんを、どこに、

父、杖でバンバン地面を叩く。

父 娘らが、道のあっち側に。きろぎよろと、目え合はさうともせず。

車の通り過ぎる音、クラクションなど。

父 はよ言へ、言はんかい。

長女 お父さん、

父 お母さんを、どこい、

次女 危ない、車が。

長女 轢かれるよ。

父 言へ、言はんかい。お母さんを、どこに、

長女 行こ、お父さん。

父 お母さんのとこか。

長女 病院。

次女 いっぺん、ように診てもらて、

父 どっこも悪ないぞ、わしゃ。

声1 かかりつけ医にも、福祉のプロたちにも相談したが、

声2 正解は、どこにも。

長女 溺れている、私たちみんな。

次女 足が立つはずの浅瀬で。

声1 払いのける。

声2 はねつける。

声1 あちこちから差し伸べられる、手を。

声2 牙をむいて。

長女 もう知れ渡ってしもた、村中に。

次女 前にうちでいっつもよその噂話しよったように、今はうちがよそにあ

れこれ言われよる。

長女 何とか手を考えんと。

次女 手、

長女 うん。

次女 あるん、手。

長女 ない。

次女 ない、

長女 ないよ。包括にも役場にも、相談でけるとこにはもう全部相談した。

次女 うん、

長女 あとは。

次女 あとは、

長女 うん。

次女 姉さん、

長女 何。

次女 いっそ、

長女 うん、

やがてぴーぽーぽと音がする。

救急隊員の男と女、担架を持ってやってくる。

父 何を、

救急隊員たち、父の脈を調べ、熱、血圧を測るなどする。
計器を示しつつ父に、

男 ごらんください、

女 脈が飛んでいます。

女 今すぐ入院しないと、

男 大変なことに、

長女 ね、お父さん、

次女 言うたとおりじゃろ、

救急隊員たち、父を担架に載せようと引きずる。

父、娘たちの腕を掴む。

父 乗るもんか。

長女 お父さん、

次女 せっかく、

長女 やめて。爪がくいこむ、

父 眼鏡はづしてみい。なぐ殴ってやるけん。

救急隊員たち、去る。

長女 もうこれ以上はどうしようもない。

次女 ああ。

長女 私らはまだ我慢するとして、

次女 無理、限界。

長女 よそにどんな迷惑が、

次女 うん。

長女 お母さんにも、

次女 うん。

長女 あとは、

次女 あとは、

長女 警察。

次女 え。

長女 うちの恥にはなるけんど、警察にも連絡をして、

声1 GPSなどの探知システムを活用して、

声2 行方不明の連絡を受ければ、

声1 見守りセンターが位置情報を確認し、

声2 約九割は家族から連絡があつてから一時間以内に発見を、

声1 家族はできるだけ早く

声2 警察や自治体に連絡し、

父 わしを氣違ひにするな。どうぞ、わしを狂人きやうがひにさせてくれるな。

次女 お父さん、

父 お前らには頼まん、もうこれぎりぢや。二度と會はん、元氣で長生きしてくれ。

長女 お父さん、

父 神さま、仏さま、お助けください。どこまでも、どうやってでもやってやる。

長女 何を、

父 何でもよかるが。わしは何も怖ない。

長女 お父さん、

父 捜し出してみせる、お母さんを。何があっても、どこまででも。

次女 お父さん、

父 むすめ我女、どうぞ俺を狂人きちがひにさせてくれるな。最早もう厄介は掛けん。さやうなら。もう二度とは逢ふまい、又と顔を見ることはすまい。と言うても、切つても切れん俺の肉ぢや、血ぢや、實女むすめぢや、いや、肉といふよりも肉の中の悪い病ひ、悪い奴ぢやけれど、俺の有ものであると言はねばならん。おのしは、俺の腐った血の生み出した腫物できものぢや、悪い瘡かさぢや、けれども俺はおのしを呪ふまい。改心の出来る時が來たら、改心せい、其そのうち、とツくりと考へて、善人になれ。

長女 何を、

次女 勝手な、

父 おゝ、天の神々よ、忍耐を賜りませ、必要な忍耐を。これ、御覽ぜよ、

神々、齡としも積り悲しみも積つて、見るも哀れな此あさましい老人をば。これなる女兒むすめ共を父に叛そむかしめられまするは、尊神あなたがたの御意でござるか。

次女 お父さん、

父 捜し出してみせる、お母さんを。何があっても、どこまででも。今に爲返ししをしてくれる、怖ろしいことをしてくれる、全世界が、どんな事かまだ解らんが、世界中を怖れ戦をのかすやうな事をしてくれる。

長女 お父さん、

父 おのれらは俺が泣くだらうと思ひをらうが、いゝや、俺は泣かぬわい。泣きたうてならぬけれども、おのれ、泣く位いならば、此心臓をば千萬片まんべん ひきちぢやに引裂つてくれうわい。おゝ、阿呆よ、俺ア狂人きちがひになりさうぢや。

長女・次女 お父さん、

父、杖を手に、荒野ヒースへ。寒風の吹きすさぶ音。

父 吹けい、風よ、おのれが頬を破れ。荒れ廻れ。天地を震動する霹靂いかづちよ、恩知らずを造るありとあらゆる物の種を打潰うちつぶしてくれい。

声1 おゝ、小父たん、乾やしきいてる邸のお聖水みずのはうが、此戸外このそとの雨水よりはましだよ。

声2 小父たん、お歸りよ。女兒むすめさんにお祝福いのりをしてお貰ひよ。

父 思ふ存分に吹け。吐^ふけ火を。噴^ふけ水を。

父、^{ヒース}荒野をよたよたと彷徨^{さまよ}う。寒風の吹きすさぶ音。

長女 どこ行つたんじゃろか。

次女 さあ。

長女 捜しに行つた方がよかろか。

次女 どこい。

長女 さあ。

次女 見つけたらどうするん、

長女 やっぱり。

次女 やっぱり、

長女 連れて帰らな。

次女 どうやって、

長女 うん、

次女 首に縄をつけて、

長女 無理じゃろ。

次女 無理、

長女 呆^ぼけとつても、相手は一人の人間じゃ。こつちの思うとおりには、

次女 ほんならどうするん。

長女 もう、待つしか。

次女 車にぶつかるとか、途中で、

長女 途中。

次女 うん。

長女 何の、途中、

次女 どつか行く、途中。

長女 どつか、

次女 うん。

長女 どこい、

次女 さあ。

長女 ほつとくしか、ない。もう、

次女 死ぬかも。

長女 もしそうでもしょうがない。もう、じゅうぶん生きた。じっと、待つ

しか、

次女 待つ、て。何を。

と、顔を見合せてたりしつつも、やはり^{ヒース}荒野に出て来た長女と次女。

声1 ぐるぐる彷徨^{さまよ}う真冬の夜中、

声2 田んぼに畑に用水路

声1 月も街灯もなく。

声2 ここはどこ、あつちはどっち、

声1 杖にすがってふらふらと、

声2 家の近くで、あわや遭難。

声1 懐中電灯を手に、後をついて歩く長女、

声2 あとからジャンパーを手に追いつく次女。

声1・2 あぜ道を巡る三つの影法師。

長女、次女、父に並び寄り添う。

長女 こがな夜中に、

父 まだ十二時にやなつとらせん。

次女 真冬の、

父 まだ十二月ぢや。

長女 こがに冷える晩に。

父 わしは二月生まれぢやけん、

長女 杖ついて。

次女 そがによぼよぼと。

長女 つい、こけでもしたら、

次女 用水路にでも、落ち込んだら、

父 そがなことはもうどうでもええ。

次女 どうでもええことないよ。

父 お前らと話がしたいんぢや。

長女 誰。

父 うん、

次女 今、目の前におるこの人は誰なん。

父 誰て、お父さんよ。

長女 違う。

父 違はん。

次女 顔が変わってしもとる。

父 ほうよ、狂人ぢや。きちがひもう狂人よ。きちがひ

次女 声も、前とは、

長女 ほいでもこのセーターは、

次女 うん、

長女 いつやら、お母さんの編んだ、

父 聲が、したんぢや。こえ

次女 え。

父 誰やら外で、呼びよるやうな、

長女 何のこと。

次女 声。

父 ほうよ。

長女 どんな、

父 どんなて。

次女 名前を、

父 いや。

長女 何、

父 お父さん、お父さん、て。

次女 お父さん、て、このお父さん、

長女 呼ぶ、て、誰が。

父 わからん。

次女 お母さん、

父 おお。

長女 そんなはず、

父 確かに。

長女 お母さんは、

父 わしは外に出た。聲こえのした方に、

次女 ジャンパーも着ぬすに。

父 温ぬくいけん、セーターが。

長女 帽子もかぶらず手袋もせずに、

父 聲は闇の中から頻りに自分を招く。はじめは氣のせみか、狸にでも化かされとるんかもわからんと思たが、

長女 狸。

次女 二十一世紀に、狸。

父 二十一世紀でも、三世紀でも。狸は居をる。

長女 里にはおらん、明治でも、大正でも。

父 何の話ぢやったかいの。

長女 うん、

父 狸の、

次女 何やら、声が、

父 ああ。

次女 で。

父 呼ぶんぢや、何遍も、何遍も。

長女 お父さん、お父さん、て、

父 おお。

長女 その、お父さん、て、

父 うん、

長女 この、お父さんのことなん、

父 さうに決まっとうが。

次女 世間にお父さんは大勢おる。

父 さうかも知れんが。

長女 ほいで、どしたん。

父 何。

長女 声に、呼ばれて。

父 外に、出た。

次女 ジャンパーも着ぬすに。

長女 帽子もかぶらずに。

父 走り出した。

長女 走る、

父 おお。

長女 誰が、

父 聲の、する方に。無我夢中で。

次女 お父さん、

父 うん、

長女 杖は、

父 山に入っとった。いつか、知らん間に。

次女 山。

父 おお。

長女 どの。

父 どことも知らん、行ったこともないやうな、深あい、

長女 杖ついて。

父 杖、

次女 歩けもでけんから、杖なかったら。

父 知らん間に、手を地べたにつけて、

長女・次女 え。

父 走りよった。四つ足で。

長女 寝言を、

父 道もない、木々の間を、風がびゅうびゅう走り抜けて、枝が頬をはじ

く。この世のどんな獣よりも速うに。どこまで行っても息も切れん。

次女 夢、

父 内臓も血も骨も、四本の脚の筋肉も新しく生まれ變はって、氣いつ

いたら手足にや毛が、顔にや髭が。夜明けがきてうっすらと光が射し

始めた頃に、谷川に顔を映してみたら、もうわしは、

長女 どう、

次女 なったん、

父 これは夢ぢや、と。

次女 やっぱり。

父 ついうとうとして、自分の軀で目え覺めたら、ついさっきまでおった

お母さんは消えて、自分一人だけ、夜中の臺所に座つとる、と云ふやうな。

やうな。

次女 そがな、夢を。

父 五十年前に亡うなったわしのお母さん、八十年前に亡うなったお父さ

ん、戦争が終はってわしが學徒動員からもんたら、お祖母さんが、蚊帳

の中に。

長女 蚊帳、

父 寝付いって、わしの顔見て、ほんの何日かして逝てしもた。あの、

金山からきた、

次女 お祖母さん、

長女 ひい祖母さん、私らの。

父 さういふ人らに圍かこまれて、これは夢、とわかつとる夢。

長女 そがな、夢も。

父 どがなことでも起こるぞ。この世の中は、どがなことでも起こる。九
十三年生きてきて、ただの一遍も経験したことがなかったやうなこと
も。

長女 九十四になったら、こないだ。

父 何でも起こる。あがな、見たことも聞いたこともない疫病が流行って、
六十五年も連れ添ふた夫婦が、會へんやうになる、そがな、ありえんや
うなことも。

長女 お父さん、

父 何でもがなことに。この世もあの世もわからんことばあいぢや。

次女 お父さん、

長女 お父さん、

父 黙れ。やかましい、黙れ。

長女・次女 お父さん。

父 生まれて、多少世の中のことがわかるやうになった頃にはもう戦争が
始まって、十四の歳に親父が病気で亡うなって、世の中は戦争一色に
なって、いづれはわしも征いかんならん、と。

長女 ほうじゃね。

父 人でも牛でも馬でも、獣でも、理屈も理由も無う押し付けられたもん
を大人しうに受け取って生きていくんがこの世の定めぢや、と。かれ

これ百年も、わしや、大人しうに、

長女 百年、

次女 九十四年じゃろ。

父 わしがどがな悪いことをしたと云ふんぢや。

次女 お父さん、

父 それが、こがな狂人きちがひに。

次女 お父さん。

父 もう死のかい、と思たけんど。

長女・次女 お父さん、

父 腹は減る。

長女・次女 腹

父 何やら、目の前を、

長女 何やら、て。

父 白いもんが。

次女 白い、

父 走って、消えた。

長女 消えた、

父 向むつこの、藪に。その途端、わしはわけがわからんやうになった。氣
いついたらわしの口が、いや顔中が、ぬるぬると、

長女・次女 ぬるぬる、

父 生臭うて。かう、拭うて見たら、

次女 見たら、

父 かう、血いらしいもんが、

長女 血。

父 あたりにゃ毛が散らばつとる。

次女 毛。

父 うさぎ、らしかった。

長女 うさぎ。

次女 うさぎ年じゃけん。

長女 干支は関係なかる。

父 そいから狐に狸に、そのうち猪まで。

長女 イノシシ。

次女 お母さんは亥年じゃ。

長女 ほじゃけん、干支は、

父 これ以上は、到底言へんが、

長女 もうだいたい聞いたよ。

次女 ねえ。

父 ほぢゃけんど一日のうちでたいがい何時間かは、元の、

長女 元の、

父 人間の心が還ってくる。

長女 人間の。

次女 心。

父 さう云ふときには人と話も、でけんことはない。かうやつて、

長女 噛み付くような話し方、

父 何。

長女 いや、

父 何ぞ。

次女 つじつまの合わん話

父 そがなことはない。

長女 わからんの、自分で、

父 はつきりしとる、わしは。

次女 返事のしようのない話。

父 返事ぐらゐ、

長女 理屈もおらんけん、返事のしようがない。

父 どこが違^{ちが}うとるか、言うたらええぢやないか。

長女 怒るじやないか、「違^{ちが}う」言うたら。

父 怒ったりはせん。

次女 しょうがないけん黙つとつたら、なしゃ黙つとんぞ、いうてまた怒る。

父 字も文も書けるぞ、まだ。

長女 何が書いてあるんかわからん。

父 わからんのはお前らの方ぢや。

長女・次女 お父さん。

父 わしは前と何も變^かはらんかるが。かうやつて人が話す言葉で話しよる

し、日記も付けれるし、難しい文も書けるし、孫や親類に米や野菜も送ってやれる。

長女 自分が何を言うて何をしたんか、氣いつかんの、

次女 なるべく見んように、氣いつかんようにしとるんじやろ。

父 おゝ。

長女 認めるん、

父 それまでは、どしてこがな獣になつてもたんぢやろ、と思ひよつたんが、ひよいと氣いついたら、何で前は人間ぢやつたんぢやろか、と思たりする。

長女 誰も助けられん。お父さんが自分でとどまろうとせんかぎり。

父 助けてやか、いらん。

次女 また。

父 獣にやかなつとらん。

長女 今、自分で、

父 恐ろしい。

長女・次女 え。

父 そのうちに、元は人間ぢやつたことを忘れてしまう。

長女 ほうじゃね。

父 この氣持ちは誰にもわからん。

次女 また。

長女 ひとり決めして。

父 助けてくれ、と言ひたいが、

長女 言うたらええじゃないか。

父 言ひたいが、

長女 誰も助けられん、お父さんが自分で言わな。

父 助けてもらはうとは思わん。

次女 プライド。

父 何。

次女 自尊心。

父 何のことぞ。

次女 年寄りを馬鹿にしよつたら、ずうっと。あれがどうならい、言うて。

父 あがに歳をとつてもて、て、近所の誰彼のことを、

父 そがなことは、

次女 ほじゃけん自分がほんとの年寄りになつて、人に馬鹿にされるんが恐ろしい。

長女 人に弱みを見せんように、困りごとにも人に知られんように、

次女 「うちは何一つ世間に恥ぢるところがない立派な家ぢや」、

長女 「自分はこがに年取つても、どっこも悪いところがない元氣な人間ぢや」と。

次女 思いたいんはわかるけど、

長女 私らの話も医者の話も、

次女 みなが心配してくれよるのに、

長女 役場の保健師さんの話も

次女 包括センターの人らの話も、

長女 みな気遣うて、

次女 心配して言うてくれよるのに、

長女 大事なところは聞き流して、

次女 無視して、

長女 耳に触る話には喧嘩腰で、

次女 その間^まあに、姿形の方が変わってしまった。

父 のう、

長女・次女 何、

父 わしは、一体どうしたら、

長女 自分に向き合うんよ、現実の自分に、ケモノになってもた自分に、

父 お前。

長女 何、

父 そがな偉さうなことが言へるんか、お前に。

長女 言えんよ。

父 ほれみい。

長女 言えんけど今は言うしかない。それしか道は、

父 ^{たま}堪らん、もう堪らん。

次女 お父さん、

父 ^{あかこ}赤子の時分から朝夕見てきた、あの向っこの山のとっぺんに^か駆け上が

って、吠える。心ゆくまで吠えたいと、思ひの丈を絞って、吠える。誰かにわかつて慾しい、誰かに。

長女 誰か、ゆうても、

父 ほぢゃけんども獣も、恐れて深う引っ込んで出ては來ん。怒り猛り

狂うた虎が、いつまでも吠えよる、と。

長女・次女 お父さん、

父 月に向かうて吠えてみても、谷底に向かうて吠えてみても、誰も、誰

一人わしの氣持ちをわかつてはくれん。

長女 何を、感傷的な、

次女 甘えたようなことを、

父 夜が明ける。わしはもうつけまた獣に戻る。その姿を間近でお前らに⁴³

見られとうはない。

長女 私らじゃて見とうはない。

父 ただ、お母さんのことだけは、くれぐれも。

次女 山のとっぺんから吠えたら聞かれるよ、お母さんにも。

父 お母さんはわしが獣になったとは夢にも思とらん。もうほとんど何

にもわからん、とはいへ。

長女 そがなことない、わかるよ。

次女 寂しいよ、お母さんじゃて。

父 お母さんには言ふなよ、わしが獣になったことを。それだけは頼むけ
ん。

長女 お父さん。

父 うん、

長女 泣きよん。

父 何、

次女 泣きよん。

父 泣きやせん。

長女 うん。

父 泣くわけなからが。

長女 うん。

父 ほんならこれで。

長女・次女 お父さん。

父 二度と来るな。

次女 どして。

父 だんだん、いろんなことがわからんやうになって、

次女 うん、

父 次はあんたとは知らずに喰うてしまつかも知れん。

次女 ああ、

父 家に歸ったら、この山のとっぺんを望遠鏡でのぞいてくれ。

長女 何で。

父 ここい立って家の方を見て、わしが吠える。その姿を見たらあんたらもわしが本当に獣になつてしもたことがわかるぢやろ。

長女 お父さん。

父 うん。

長女 泣きよん。

父 何、

次女 泣きよん。

父 泣いたりするもんかい。

(終わり)

〈引用・参考文献〉

- 『新修シェイクスピア全集 第三十巻 リヤ王』坪内逍遙譯、中央公論社、一九三四年（父、および声1、2のせりふの一部で引用、参照。）
- 「微生物感染がアルツハイマー病の引き金に？」『Nature ダイジェスト』二月号 (SPRINGER NATURE) (五頁、声のせりふで引用、参照。)
- 「認知症新薬、国内承認の結論は年末か『夢の薬か審査』」、『朝日新聞デジタル』「医療サイト 朝日アピタル」二〇二二年六月八日、および、「認知症の新治療薬、割れる評価『リスクより利益高い』」同右 六月九日（五頁、声1、2のせりふで引用、参照。）
- 「認知症の行方不明者、最多を更新 地域で捜索の枠組みも」『朝日新聞デジタル』「医療サイト 朝日アピタル」二〇二二年六月二十四日（三十三頁、声のせりふで引用、参照。）

〈参考文献〉

- 「山月記」、『山月記・李陵 他九篇』中島敦著 岩波文庫（一九九四年）
- 『リア王』シェイクスピア著、野島秀勝訳 岩波文庫（二〇〇〇年）ほか